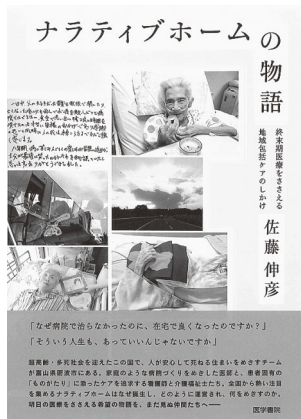


(書評者)
金沢医科大学看護学部長・
精神看護学教授
長谷川雅美

『ナラティブホームの物語
終末期医療をささえる
地域包括ケアのしかけ』

佐藤伸彦 = 著

2015年発行
1800円＋税 医学書院



地域で実践される、 「死」を見据えた医療者の挑戦

著者である佐藤氏との出会いは、私が前任校の大学
院生を連れて「ナラティブホーム構想」（本書第1
部）の勉強会に参加した時である。私自身常々、精神
的諸問題を持つ人々に接しているなかで、「人として
生きることとは？」を問うてきた。

誰にでも平等に訪れる「死」を、人が「生きる」こ
とのゴールとするならば、看護はその人らしい生き方
に付き合い、医療的視点を持ちながら、生活に依拠し
たゴールのあり方を求めたい。この勉強会には幾度も
参加したが、「家庭のような病院」作りのために、著
者を核として多様な背景を持つ地域の同志たちが集
い、熱く交わされる言葉にあふれていた。終末期にお
ける在宅医療のあり方をさまざまな角度から問い、時
には回りくどいと感じられるほど慎重にその実現の可
能性を探っていた。眼前の患者の生涯を「物語」とし
て思い起こし、その人にとっての最良の状況で人生の
最終章の日々を過ごすことを医療職が念頭に置いたと
ころから始まるケア。大きな医療的挑戦であったと思
う。今やこのナラティブホームは、確固たる医療資源
として根つき頼りにされていることを、地域住民の私
はよく知っている。

ナラティブホームは、著者の造語である。「病院に
いるような安心感があり、自宅にいるような自由やプ
ライバシーがあり、終末期を安らかに迎える空間」と
説明されている。

患者はここに賃借する住民として住もう。スタッフ
が往診・介護に来ることを保証し、希望者には食事
サービス（外注）をも提供するユニークな終末期医療

スタイルだ。こうした著者の発想は、本書でも随所に
表現されている通り、いわゆる「医師の領域」から飛
び出している。医学モデルと社会モデルを混在させ
た、独自の佐藤哲学とも言うおうか。「死を迎える人」
に医療者として最善を尽くすためにたどり着いた形態
であると言えよう。本書では、「治す」医療だけでなく、
残り少ない「生」を援助することと「死」を真正
面から見据えた医療の大切さを、現代の医学・医療に
問いかけている。また医師、看護師、介護職が連携し
た訪問医療の大切さを、具体例を通して伝えている。

ナラティブホームが完成するまでにはさまざまな壁
があったが、むしろそこに至るまでの医療場面でのエ
ピソードが興味深い。その時々のかかわりの実際を
「ナラティブシート」として独特の記録様式を用いて
記述している。看護を専門とする者にとっては、患者
の情報を医療者間でどう共有するか、スタッフの感情
表出と医療的視点をどう統合し、看護に生かすか、福
祉職との協働をどうしていくのか、医師の医療行為に
沿ったケアと患者や家族の反応にどう向き合うのか
を、自らに問い直す機会になるのではないだろうか。
本書後半では、その運営についても実に具体的に示し
ており、今後の超高齢社会に向けて事業展開を計画し
ている人々にとっても大いに参考になるであろう。

本書は、在宅での終末期医療の在り方を情熱的に実
践する1人の医師から、医療・福祉に関するすべて
の人々に提示された実践的教本として、またそれぞれ
の物語を作っていく動機となるであろう。

精